

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月20日現在

機関番号：32641

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2012

課題番号：21720178

研究課題名（和文）英語史における語彙拡散

研究課題名（英文）Lexical diffusion in the History of English

研究代表者

堀田 隆一（RYUICHI HOTTA）

中央大学・文学部・准教授

研究者番号：30440267

研究成果の概要（和文）：語彙拡散は、言語変化がどのように進行するかについての理論として提起されてきたが、具体的な事例に則した語彙拡散の研究は多くはなされていない。本研究では、英語史におけるいくつかの言語変化を語彙拡散の観点から考察するという試みの中で、種々の理論的、実践的な問題が生じた。多くの言語変化の過程は語彙拡散が理論的に予想する以上に複雑であり、複数の要因に分解した上で各要因の貢献度を慎重に吟味する必要があることが明らかにされた。

研究成果の概要（英文）：Lexical Diffusion has been proposed as a theory that explains the way in which language change proceeds, but few serious attempts have been made to test its theoretical validity by applying it to particular language changes. The present research has addressed several language changes in the history of English from a lexical diffusionist point of view, resulting in a number of practical and theoretical problems to be tackled. Language changes proceed in a far more complicated manner than might be theoretically expected, so that it is necessary to take into consideration various factors that should combine to determine the schedule of the change.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
2012年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：英語史、言語変化、歴史言語学、語彙拡散、中英語、近代英語、コーパス言語学

## 1. 研究開始当初の背景

（1）語彙拡散は、1978年に Wang によって提案された音韻変化の典型的な進行パターンである。それ以前に支配的だった新文法学派による「一律の音韻変化」への反論として提出された仮説であり、以降の言語変化論にかかわる論争に火をつけた。語彙拡散に

よると、音声変化はまず少数の単語から始まり、徐々に多くの単語へと適用されるが、ある段階に達すると進行速度を急激に増し、短期間のうちに一気に大半の語彙を飲み込む。このようにして語彙の大部分が変化を経たあと再び速度は緩まり、残った少数の語彙をゆっくりと消化してゆく。遅・速・遅という

この変化の型は、横軸に時間をとったグラフで表すと典型的なS字曲線を描くことになる。

S字曲線で表わされる変化の進行パターンは、当初論じられた音韻の変化のみならず、統語、形態、語彙など言語の他部門における変化にも適用されることがその後の研究によって明らかになってきた。例えば Ogura や Ogura and Wang の研究では、英語史における三単現の *s* や迂言的 *do* の発達に S 字曲線を描いて進行したことが例証されている。また、最近では橋本が日本語における外来語の借用のパターンも同様の曲線を描いていることを報告している。このように、語彙拡散は言語変化一般を記述し説明する理論へと成長してきている。さらに付言すれば、語彙拡散の示すパターンは、疫病、土器、巷の噂など言語以外の現象の拡散パターンとも比較され、拡散という現象一般に関する社会学的研究に間接的に寄与するものと考えられる。

(2) 本研究者は、数年間携わってきたテーマ「英語における名詞複数形の *s* の発達」において、語彙拡散が当該の形態変化にも適用されることをすでに示していた。より具体的には、複数形の *s* は初期中英語期(1150-1300)を中心とする時期に他の複数形態を押しつけて一般化した、その一般化の過程は、方言ごとに多少の違いはあるものの、全体として典型的な S 字曲線を描いたことを明らかにした。この結果により、英語における他の多くの言語変化も語彙拡散の視点から記述できるのではないかという見通しを得ることができ、本研究課題を設定する契機となった。

## 2. 研究の目的

上述の語彙拡散を巡る研究環境を背景に、研究目的として、具体的な言語変化の事例により語彙拡散の理論を検証し、洗練することを掲げた。近年、語彙拡散は広く認知されるようになってきているが、いまだに理論として洗練の余地を多く残しており、優れた具体的事例の研究に基づいてその有効性が証明される必要がある。なすべきは、語彙拡散が見込まれる英語史上の複数の言語変化を記述し、言語変化の進行に関する一般的なパターンを発見することである。同時に、これまで語彙拡散として提起されてきた事例を再検討し、批判的に修正を加えながら語彙拡散の理論を洗練させることである。換言すれば、本研究では語彙拡散という枠組みによって言語変化の事例を調査することに終始するのではなく、その調査によって枠組み自体を問うて育ててゆく姿勢を重視した。

上記の目的を達成するためには、英語の歴史的発達の具体的な事例を取り上げ、その進行パターンを明らかにすることが必要であ

る。語彙拡散の進行パターンが言語変化に一般的に観察されるだろうとの予想のもとで、扱う事例は理想として多種多様であるのがよいと考える。つまり、時代(古英語、中英語、近代英語、現代英語)と言語の部門(統語、形態、意味、語彙、音声)の点において、なるべく幅広く事例を取り上げるとよいだろう。この観点から、本研究では以下の事例を選択した。(1) 初期中英語における複数形態(特に *s* 複数形)の拡大、(2) 現代英語における外来系複数形態の消長、(3) 古英語から現代英語にかけての形容詞接尾辞 *-ish* の意味的・語彙的拡大、(4) 中英語期における形容詞の屈折語尾の消失、(5) 初期近代英語以降の強勢パターン「名前動後」の発達である。このように、5つの幹となる本研究とそこから派生した小研究を軸として、多角的に語彙拡散を検証し、発展させる計画を立てた。

## 3. 研究の方法

以下ではまず上記の目的を達成するために採用した方法について総論を述べ、次に5つの具体的な言語変化を調査するにあたっての方法の各論を記す。

総論としては、具体的な事例により語彙拡散が言語変化に一般的に観察されることを示すべく「量」に依拠する研究を遂行する一方で、ある事例について特に詳細に調査し、それを語彙拡散の観点から記述・説明するだけでなく、むしろ語彙拡散の理論化に貢献するような「質」に重点をおく研究を遂行する必要がある。量を重視する研究の手段としては、近年通時的言語研究の主流となってきた電子コーパスを積極的に用いることとするが、コーパス研究の異ともいえる文脈や背景が捨象されがちな点には十分な注意を払うこととする。電子コーパスの利点を最大限に生かしつつも、文献学の伝統にのっとり、テキストとそれを取りまく文脈との関係に配慮した上で、言語事実の質的な側面にも迫るよう努めた。

研究成果公表の方法としては、論文執筆や国内外の学会発表のほか、ウェブ上に公開スペースを確保し、中間段階のものを含めて研究の成果を掲載してゆくこととした。具体的には、中央大学のサーバ内の <http://c-faculty.chuo-u.ac.jp/~rhotta> に研究・教育用のページを設け、そこから研究テーマのカテゴリー別にリンクを張るという形式で、情報を公開した。

次に各論に移る。

(1) 初期中英語における複数形態(特に *s* 複数形)の拡大に関する研究。このテーマは、本研究に先立って数年間にわたるデータベースと考察の蓄積があったため、最も着手しやすいテーマであった。これまで進めてき

た関連研究は、初期中英語期を中心とした400年ほどの時代について、主として *A Linguistic Atlas of Early Middle English (LAEME)* を用いた量的な研究であった。量的な研究によって *s* 複数形の拡大を大づかみにすることはできたが、方言によって語彙拡散の曲線は必ずしも予想される *S* 字曲線を描かず、むしろ南部諸方言などで *N* 字曲線ともいふべき変則的ともいえる消長パターンが観察されていた。そこで南部諸方言に焦点を当て、個々の方言ごとに細かな時代区分を設定して *s* 複数形の消長を追うことにした。実際にはより細かいレベルで、個別の作品ごとに傾向が異なることも珍しくないため、量として得られるマクロな視点と文献学的な考察からしか得られないミクロな視点とを織り交ぜて、*s* 複数形の拡大という問題にアプローチしなければならなかった。個別の作品を利用した研究では、複数の写本が残されており時代・方言間の比較の可能な *Poema Morale* を対象とした。

また、同じく主として南部諸方言について、なぜ語彙拡散で予想されるような典型的な *S* 字曲線が描かれぬのかという問題についても考察した。ここには、*s* 複数形の拡大の順序と速度の問題が関わっている。特に *s* による刷新形がどのようなスケジュールで語彙中に拡がってゆくのかを、名詞の歴史的な文法性と形態クラスの2つのパラメータに注目して調査した。

(2) 現代英語における外国語系複数形態の消長に関する研究。*s* 複数形の拡大は主として中英語期に進行したため、これまでの研究では専らこの時代に注目していた。しかし、近代英語期以降、ラテン語やギリシア語から多くの名詞が借用され、その複数形はしばしば元言語の形態を保持したが、一方で *s* 複数化への傾向も示してきたという事実がある。現代英語においても外国語複数形は散見されるが、*s* 複数化の傾向は直近の1世紀の間どのくらい進行しているのだろうか。本研究では、20世紀の各段階における英語辞書を用いて、借用語の複数形の変異を通時的に跡づけた。

(3) 古英語から現代英語にかけての形容詞接尾辞 *-ish* の意味的・語彙的拡大に関する研究。名詞から形容詞を作る派生接尾辞 *-ish* は、その起源を古英語以前に求めることができるが、古英語期においてすら少数の固有名詞に接続するにとどまり、生産的な接尾辞ではなかった。ところが中英語期に入ると、普通名詞にも接続するようになり、生産性を増した。その過程で *-ish* の意味にも変化が生じ、単なる形容詞を派生するという品詞転換的な機能のみならず、軽蔑などの否定的な含意や、近似を示す意味を得た。本研究では、*OED* により、*-ish* 派生語の質と量の発展を、

古英語から現代英語にかけての通時的な観点から調査した。

(4) 中英語期における形容詞の屈折語尾の消失に関する研究。中英語期には、形容詞の屈折語尾が徐々に衰退していったが、この衰退の過程について通史的観点から記述した研究は少ない。本研究では電子コーパス *LAEME* の利用や校訂本からの手作業での調査により、方言別、テキスト別といった観点はもとより、形容詞の数、格、定・不定などの形態・統語的環境を細かく区分した上で、各時代においてどのパラメータがどのくらいの強さで屈折の残存に関与しているかを明らかにしようとした。言語項目の拡大のみならず衰退においても、語彙拡散のパターンが逆適用できるかどうかを考察する試みである。

(5) 初期近代英語以降の強勢パターン「名前動後」の発達に関する研究。初期近代英語以降、名詞と動詞の機能を合わせもつ語 (*ex. record (n.) vs recórd (v.)*) が増加してきた。現代英語においても続いているこの名前動後の増加は、*Sherman* などの先行研究で語彙拡散の一例として言及されることはあったが、そこでの調査は主として17-18世紀の拡大についてのものであり、19世紀以降、とりわけ現在も進行中の拡大については注意が払われてこなかった。そこで本研究では、19-21世紀における名前動後の拡大を、各段階における複数の辞書を参照することにより具体的に跡づけようと試みた。その結果、当該の言語変化の過程は、語彙拡散の理論が示唆する理想的かつ単純なものではなく、複数の要因が相互に作用している複雑な過程であることが明らかになった。

#### 4. 研究成果

(1) 上に述べてきた5つの研究のそれぞれについて、研究成果を要約する。

① 名詞複数形の歴史的発展について、初期中英語の方言間にみられる分布の共通点と相違点について二つの論考をおこなった。一つは、語彙拡散理論の予想とは一見すると異なる分布を示す南部諸方言の状況を複数のテキストの分析により明らかにしたものであり、理論の可能性と限界を示唆することができた。結論として、語彙拡散理論は個々のテキストの文献学的な分析による裏付けと修正のもとに発展されてゆくべきであることが確認された。もう一つは、南部諸方言を中心としつつも方言全体の異形態の分布を分析することにより、語彙拡散を進行させた二つの主要因として歴史的な文法的性と屈折タイプを認めることができた。量化された客観的な分析から主要因を同定できたことにより、本研究のアプローチが言語変化の記述と語彙拡散の理論的発展に貢献しうる

ことを示すことができた。

また、初期近代英語期において鍵となりうる説教詩 *Poema Morale* の言語を文献学的に分析することで、複数形の歴史に具体的な肉付けを施した。*Poema Morale* は複数のヴァージョンで現存する数少ない初期中英語テキストの1つであり、その複数形態やその他の形態の分布を文献学的な観点から考察することで、間接的にこれまで複数形の拡大について論じてきた語彙拡散の理論的主張に説得力をもたせることができた。

加えて、過年度からの研究により蓄積されていた名詞複数形の諸データに加え、初期中英語コーパス *LAEME* から引き出された語彙頻度表の情報をかけあわせることによって、言語変化の進行する順序と語の頻度との関係を探った。その結果、低頻度語がこの言語変化を牽引していることが明らかにされた。この成果は、2013年5月にスペインで開催される国際学会 ICOME-8 にて公表した。

② 時代を20世紀の現代英語期に移し、外来の特殊な名詞複数形の *s* 複数形への規則化という言語変化を論じた。複数の辞書とコーパスを用いて20世紀の通時の変化を俯瞰した結果として、非常に緩やかな速度ではあるが着実に規則化の方向へ流れていることが判明した。語彙拡散の予想するS曲線を想定するのであれば、当該変化はいまだ変化の初期段階である。今後この傾向が続いてゆくのであれば、変化を推し進める主要因は何であるか。語彙拡散の理論的發展に関係しうる新たな問題が生じている。

③ 語彙拡散は形態論以外の言語変化も同様に説明できると見込まれ、形態論が意味論に隣接する接尾辞の問題に注目した。軽蔑的な意味を伴うことの多い接尾辞 *-ish* を取りあげ、その歴史的拡大を *OED* からの事例によって跡づけた。語彙拡散が前提とする顕著な拡大期が中英語期にあったことが明らかになり、今後の語形成や意味の分野における語彙拡散研究にも新たな展望が開かれたと考える。

④ 中英語テキスト *Kyng Alysaunder* を対象として、複数の形態・統語的パラメータを設定し、形容詞屈折語尾 *-e* の有無を量的に調査した。この成果は日本英文学会全国大会にて発表した。その後、電子コーパスを用いて広く初期中英語テキストを対象とした同種の研究が進行中である。方言によって時機と速度に差はあるが、全体として類似したパターンで屈折語尾が消失してゆく様子を量的に示すことができた。その成果は、2012年4月に国内学会で、同8月に国際学会 ICEHL-17 にて発表した。また、同内容は論文の形で公表した。

⑤ 現代英語でまさに進行中の事例であるため、語彙拡散を結果としてとらえるだけ

でなく過程として観察することができるという利点も期待された研究である。この題目についてすでに論文を1本公表しており、現在、来年度の学会及び論文での公表にむけて成果をまとめているところである。過年度までに蓄積してきた名前動後のデータを総合し、4世紀半におよぶその発展の歴史を記述し、歴史言語学的な立場から説明しようと努めた。これにより語彙拡散の事例の1つを詳述することができたと確信している。語の強勢位置の変化に語彙拡散を応用する際の問題点を指摘することができ、理論的な洗練にも貢献できたと考える。

(2) 上記の研究全体を通して、語彙拡散の理論の検証と洗練を目指してきた。その結果、明らかになったこと、および今後の研究として残されている課題を4点に要約する。

① 語彙拡散において変化の順序を決める要因には様々なものがあり、個々の言語変化に独自の要因が関与している可能性が高い。そのような要因と各々の効き具合は、個々の言語変化を詳しく調査することによって見いだしてゆく必要がある。

② しかし、語彙拡散の順序を決める要因としての頻度効果 (frequency effect) は、多くの変化に広く薄く効いている可能性がある。歴史コーパスから引き出される歴史語彙頻度表を作成することによって、多くの変化においてこの仮説を検証することができるだろう。

③ 形態、語彙、意味、韻律についての語彙拡散と考えられる事例を扱ってきたが、その他の事例、とりわけ統語的な事例は扱うことができなかった。変異の幅が他の部門よりも比較的少ないとされる統語において、語彙拡散の事例の振る舞いが他の場合とどのように類似し、相違するのかを今後確かめてゆく必要がある。

④ とりわけ名前動後の拡大の研究において明らかになったことだが、過去に生じて終止した変化とは異なり、現在進行中の変化について語彙拡散の観点から調査することは、実際の変化の複雑さを認識する上で重要であるばかりでなく、理論的な挑戦を含むという点で有意義である。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計12件)

- ① Hotta, Ryuichi, “The Order and Schedule of Nominal Plural Formation Transfer in Three Southern Dialects of Early Middle English.” *English Historical Linguistics*

2010: *Selected Papers from the Sixteenth International Conference on English Historical Linguistics (ICEHL 16)*, Pécs, 22–27 August 2010. Ed. Irén Hegedüs and Alexandra Fodor. Amsterdam: John Benjamins, 2012. 94–113 .査読有

② Hotta, Ryuichi. “Noun-Verb Stress Alternation: Its Nineteenth-Century Development and Its Earlier Historical Backgrounds.” *Lexicon* 42 (2012): 79–94. 査読有

③ Hotta, Ryuichi. “Leaders and Laggards of Language Change: Nominal Plural Forms in -s in Early Middle English.” *Journal of the Institute of Cultural Science (The 30th Anniversary Issue II)* 68 (2010): 1–17. 査読無

④ Hotta, Ryuichi. “Review of *The Development of the Nominal Plural Forms in Early Middle English*.” *Studies in Medieval English Language and Literature* 25 (2010): 95–112. 査読有

〔学会発表〕（計 8 件）

① Hotta, Ryuichi. “A LAEME-Based Study on the Levelling of Adjectival Inflections in Early Middle English.” The 17th International Conference of English Historical Linguistics (University of Zurich). 2012 年 8 月 23 日.

② Hotta, Ryuichi. “Textual Peculiarities and Textual Transmission of the *Poema Morale*, MS M.” The 7th International Conference on Middle English (University of Lviv). 2011 年 8 月 3 日.

③ 堀田隆一 「Auchinleck MS のロマンスと中英語方言 個別化の視点から」 日本英文学会第 83 回全国大会 「中世ロマンスと＜個＞の多様性」シンポジウム（北九州大学），2011 年 5 月 21 日.

④ Hotta, Ryuichi. “What Determined the Schedule of the s-Plural Diffusion in Southern

Dialects of Early Middle English? .” The 16th International Conference of English Historical Linguistics (University of Pécs). 2010 年 8 月 24 日.

〔その他〕  
ホームページ等  
<http://c-faculty.chuo-u.ac.jp/~rhotta>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

堀田 隆一 (Ryuichi Hotta)

研究者番号：30440267

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし